



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 竹内楊園編『嚙鳴集』について  |
| Author(s)    | 鷲原, 知良  |
| Citation     | 語文, 84-85, p. 119-128   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/69062">https://hdl.handle.net/11094/69062</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 竹内楊園編『嚙鳴集』について

鷗原知良

で全十冊（第六集のみ二冊）が上梓された<sup>(2)</sup>。見返し及び柱題には、最初の一冊が「嚙鳴集初編」、以下の九冊は「嚙鳴第〇集」と刻されているので、以下この標題に従い記述する。見返しの刊記によると、それぞれの冊の刊行年次は以下の通りである。

安政六年（一八五九）夏 初編

万延元年（一八六〇）七月 一集・三集（見返しは二冊共通）

文久元年（一八六一）七月 四集・五集（同板の見返し）

慶応元年（一八六五）十月 六集（丁の数字は通番）

慶応二年（一八六六）九月 七集・八集（見返しは二冊共通）

慶応三年（一八六七）七月 九集

二・三、四・五、七・八集はそれぞれ同時に刊行されているから、実質的には全六編であるが、それでも計三編六冊が刊行された大沼枕山編の「同人集」を凌ぎ、近世後期の漢詩選集の中でも『嚙鳴集』が最も大部のものの一つであったと思われる。

本稿では安政年間末から幕末にかけて刊行された竹内楊園編『嚙鳴集』について同様の視点から考察する。『嚙鳴集』は安政六年（一八五九）の初編を嚆矢として、慶応三年の第九集に至るま

『嚙鳴集』とその編者竹内楊園について、從來の文学史は殆ど

近世後期の漢詩選集には、たとえば市河寛斎、柏木如亭、大窪詩仙、菊池五山の詩を収める『今四家絶句』（梁川星巖等編集、文化十二年、一八一五刊）のように、當時一級の有名詩人の作品を集めたものに対し、文学史に名を留めない無名の詩人の作を含め広く集めたものも多く存する。その収録範囲の広さにより、後者の選集の方がむしろ前者の選集よりも當時の詩壇の状況をよく伝える資料となる場合がある。稿者もこれまでに文化文政年間の『近人小詩』、『今人詩英』や嘉永安政年間の『同人集』、また万延文久年間の『近世名家詩鈔』、『近世詩林』について考察したことがある<sup>(1)</sup>。

本稿では安政年間末から幕末にかけて刊行された竹内楊園編『嚙鳴集』について同様の視点から考察する。『嚙鳴集』は安政六年（一八五九）の初編を嚆矢として、慶応三年の第九集に至るま

言及してこなかったと言つてよい。『日本古典文学大辞典』（一九八三～五年、岩波書店）、近藤春雄『日本漢文学大事典』（一九八五年、明治書院）等にも、楊園及び『嚙鳴集』に関する一片の記述も見られない。しかし、ようやく比較的近年に至り郷土史の面から楊園についての詳しい研究が発表された。石丸和雄氏の「竹内楊園について」〔伊予史談〕<sup>288</sup>（290号、一九九三年一・四・七月）である。まことに精力的な研究であり、稿者は楊園の伝記に閲して現時点でこれに付け加えるべき材料を持たない。ただ、石丸氏の論考は楊園の評伝を主体としているため、『嚙鳴集』の解説については若干補って指摘すべき事項もあると思われる。本稿では以下その点を中心述べたい。

まず、竹内楊園の事績について、石丸氏の論考に拵りつつ略述しておく。文政十一年（一八二八）頃（石丸氏による推定で、二年の誤差がありえるという）に伊予西条に生まれた楊園は、十二歳前後で江戸へ出て林家に学び、やがて食客として関東各地を遊歴した後、河内丹南藩儒に迎えられる。丹南藩は関東に領地を有していたので、楊園は主に江戸に住み詩壇にも名を馳せ『嚙鳴集』を陸続と板行した。その後、藩儒を辞して浪人の身となり、慶応三年に至って越後椎谷藩に召されるが、明治元年、彰義隊に連座したことにより斬殺され、四十一歳の生涯を終えたという。この楊園の終焉については依田学海の『学海日録』の記事により知られる所である。

楊園の『嚙鳴集』以外の編著には、『東毛復讐始末』、『西省集』、

『今英靈集』などがあるが、楊園個人の詩集は、伊予帰省の折の作をまとめた『西省集』のみである。石丸氏は、幕末期の他の漢詩選集の類に楊園の詩が見られないこととも併せて、漢詩実作者としての詩壇での地位は低かったかと推察しているが、いずれにせよ楊園の最大の事績が『嚙鳴集』の編集であったことは間違いない。

## 二

さて、稿者はこれまで『同人集』等の近世後期の漢詩選集について、収録される詩体に注目して考察を重ねてきた。すなわち、七言絶句等の近体詩に限定せず、長編の詩をも成し得る古体詩が含まれているか否かが、選集の性格を捉える際に一つの重要な指標となるというものである。もちろん古体詩が必ずしも近体詩よりも優れるということではないが、有名有力詩人は各々長短はあれ、古体も近体も成し得るのに對し、七絶等の近体のみしか作る力のない詩人も多く存在するのが、この時期の詩壇の実況であったからである。

以下、『嚙鳴集』についても同様に収録作品の詩体に関して考察したい。石丸氏は、『嚙鳴集』第二集以後においては、古賀精里、菊池五山、篠崎松竹、中島棕隱など物故詩人の作品を収録しなくなつたことを指摘している。

『嚙鳴第一集』以後においては物故詩人の作品を利用しなくなり、また当代有名詩人の作品の掲載も減少して、もっぱら

楊園と交流する範囲内の先輩知人門弟の作を主とするようになつてゐることは、「嚙鳴」の本義にかなつたものといえよう。(「伊予史談」289号)

『詩經』小雅の「伐木」に拠り交友の意を示す「嚙鳴」の語を冠した標題に、二集以後はより適つた詩集になつたものである。この初編から二集への変化に加えて、第一集以後では古体詩が収録されるようになったことにも注意するべきであろう。第一集に添えられた楊園の例言には以下のようにある。

去年、既に初集を刊す。輕舉鹵莽、膾を噬むも及ばず。因て今、第二第三集を刊するに、大沼枕山、鷺津毅堂に請ひて之を正す。庶幾くは、前日の失を免れんことを。更に圈点を加へて以て読者の心目を豁く。亦二兄の力なり。(原漢文)

これにより、二集三集では『嚙鳴集』編集の際に、大沼枕山(一八一八～一八九一)と鷺津毅堂(一八二五～一八八二)の二家の助力があつたことがわかる。枕山と毅堂は従兄弟関係にあり、兩者の評伝は永井荷風の『下谷叢話』に詳しい。兩者ともに『嚙鳴集』二集と同じく万延元年刊行の植村蘆洲・真下晚菘編『六名家詩鈔』に一巻を充てて作品が收められ、当時の漢詩壇を代表する詩人であった。枕山が特に古体を重視した詩人であることは定評であり、毅堂もまた『六名家詩鈔』に少なからぬ割合で古体詩を選ばれている。したがつて『嚙鳴集』に古体が収録されるようになつたことにも、二家に影響された部分があると考えられるのである。『嚙鳴集』に寄せられた序跋や題詞等の一覧は以下の通りである。

りであるが、これを見ても枕山と毅堂が深く関わっていることが確認できる。

初集 〈序〉 堤静斎 〈跋〉 鷺津毅堂

二集 〈序〉 大沼枕山・小橋橋陰 〈跋〉 依田学海

三集 〈序〉 鷺津毅堂・川田劉

四集 〈序〉 大沼磐渓・三島桐南 〈題詞〉 川田甕江・堤静斎

五集 〈序〉 佐藤牧山・春田九臯 〈跋〉 八木南台

六集 〈序〉 大沼枕山・小林畏堂 〈跋〉 長谷川昆溪

七集 〈序〉 菊池三溪 〈題詞〉 鷺津毅堂・佐藤牧山・植村蘆洲・赤松玄民

八集 〈序〉 佐藤牧山・小南領南 〈題詞〉 大沼枕山・中村湘東・閔雪江・棚谷鳳陽

九集 〈序〉 大沼枕山 〈題詞〉 長谷川昆溪・松田聰松・鈴木松塘

・村井樂所・菊池三溪・植村蘆洲 〈題詞〉 佐藤牧山・小林畏堂・服部隨庵・閔雪江

また、『嚙鳴集』第一集には「増刻」部分があるが、ここに含まれる七家十三首のうち三首が古体である。さらに、後に掲げる一覧に見られるように『嚙鳴集』では、詩集の顔とも言うべき巻頭の詩家の作に古体詩が置かれることが多く、二集以後では五集を除くすべての冊の第一作が古体詩となつてゐる。これららの点から

らも第一集から採録するようになった古体詩を重視する傾向がうかがわれるのである。

### 三

『嚙鳴集』全九集には、序跋における題詞等を除いた本文部分に限ると、延べ八百七十九名の詩人の千四百一十八首が収められている。なお、複数の集に重ねて収録される詩人もあるので、実際の収録詩家数は六百七十九名になる。<sup>(3)</sup> そのうち古体詩を採られる詩人の数は六十六名で、詩篇の合計数は八十五首である。これらの数字は、以前に考察した大沼枕山の『同人集』が千百七十三首のうち六十首が古体であるのとほぼ同じ割合であり、約二十首に一首が古体という計算になる。(『同人集』約五・一%『嚙鳴集』約六・〇%) また、古体を採られる詩家の全体に占める割合も、四百九十七名のうち五十一名の『同人集』と近く、ほぼ十人に一人である。(『同人集』約一〇・三%『嚙鳴集』約九・七%) 『嚙鳴集』初編が古体を收めないことを勘案すると、二集以後の『嚙鳴集』方が若干高い割合で古体を收めているといえよう。

結局の所、古体詩を製作する力量を備えた詩人というのは、ある程度限られており、同じように有名無名の詩家を多数収録する『同人集』と『嚙鳴集』が古体詩の割合において近似した値を示すのは、むしろ自然な結果であるのかもしれない。ただ、枕山等が楊園の『嚙鳴集』編集に助力した結果として、その詩人の作品に古体詩のある場合は積極的にそれを採録しようという姿勢があったのではないかろうか。

以下は『嚙鳴集』に収録される古体詩の一覧である。このうち枕山の『同人集』と共に古体詩を採られる詩人は、鈴木松塘、鷺津毅堂、大槻磐渓、佐藤牧山、植村蘆洲、長谷川尾溪、関雪江、横山湖山の八名である。いずれも、個人の詩集を刊行する程度に詩人として後世に名を遺しており、先後輩もしくは門人として枕山と何らかの関わりがあつた人物である。このことも『嚙鳴集』編集への枕山の影響を示唆しているよう。

### 『嚙鳴集』古体詩一覧

○印は巻頭の詩人（六集の加藤霞石は二冊目）

●印は『同人集』にも古体詩を採録される詩人

#### 二集

○齋藤拙堂 寄題大石氏故宅桜花・七古

庄原篁墩 甲越歌・七古

高井鴻山 七月十五日詣祥雲寺展墓有感・七古

鈴木蓼廬 過新田左將公戦没歎感而有作・七古

鈴木松塘 ● 同子闇牡丹花下分韻賦詩適高木抑齋携酒至遂大

醉子闇醉中詩先成醉後時其韻・七古

川田甕江 題銀猫投兎図・七古

鷺津毅堂 ● 梅鶴高士図・七古

謝人贈檳榔石・七古

积 清泉

鳶兒歌贈祖牛道人·七古

山崎桃蹊

春霖·五古

不破不言

春柳·七古

○佐藤牧山

渡矢口川·七古

赤松桐陰

閏七月望同鼎齋先生及諸子墨水賞月遂飲川口樓

宮原蒼雪

桜化石·七古

浅田栗園

得墨字·五古

植村蘆洲

猩猩図·七古

蒙古入寇図

蒙古入寇図·七古

余語桜軒

猿捉月図·七古

○大槻磐溪

趙雲·七古

鐵鉉瞰已肉図

讀六臣伝·七古

後藤松陰

讀書有感·五古

巖井鼓山

紀屠者殺伶優事·五古

星野洵堂

神辺駅過廉塾·七古

沢田静脩

寄松祝執政熊崎翁七十及其婦人六十寿·七古

廣瀬旭莊

池立馬市·七古

稻波蘭苑

夜坐·五古

小原鉄心

雜言二首·五古

長谷川昆溪

○開春記事·七古

富田鷗廬

囚虜詠梅図·七古

三島桐南

撼山易·七古

斎藤誠軒

織糸詞·七古

積 了英

我有美酒行·七古

平井澹齋

丹霞山歌送青木惟高帰省南予·七古

高井鴻山

打水詞·七古

頼 支峰

觀先君子画橫空盤硬図·七古

高井鴻山

殺蠅菌·七古

保岡近仙

韓世忠騎驥圖·七古

閑 雪江

好頭頸擬古樂府·七古

佐田水竹

松本先生墓下作·七古

八雲琴歌贈能連師

·七古

嵩 春斎

除夕戯作·七古

加藤掬靄

題所藏小予山石·五古

横山徳溪

名和公·七古

平井東堂

咏虎·七古

柴田肇庵

贈千葉曲江·七古

本沢虛堂

箭口津謁新田神君祠·五古

小橋橋陰

寒夜偶感·五古

依田学海

起苗泉·七古

四集

馬島杏雨

小橋橋陰

釈密乘

買梅・五古

觀磐溪翠崖合作山水図歌・七古

謝蘭畹贈藜杖・五古

六集

○菊池三溪

横山湖山●

苦吟十韻・五古  
題群盲評古器図・七古

落合竜知  
出塞・五古

佐藤牧山●  
觀谷文晁画竜図引・七古

山田梅東

儀衛恭紀六韻詩・五古  
題東岳画醉軒道人納涼図・七古

○加藤霞石  
山賦古風一篇以記之・五古

余曾獲一奇石於里中之予山以其形似焉命曰小予

七集

千年蘆歌・七古

遠田種菜  
開爐話旧・五古

遠田種菜  
題雪夜徵行図・七古

田 小舟  
子房捧履図・七古

詠史・五古

和淵明飲酒・五古

甲子歲紀事・七古

八集

巖本琴城

醉後記感・五古

○鈴木松塘●

備後三郎題詩桜樹図・七古  
題項王泣虞図・五古

棚谷善庵

讀史偶感・七古  
望海作・七古

松下松陰

咏史・七古  
題林院読書図・七古

小島晋齋

湯川奎州  
有人・五古

九集

○田 小舟

棚谷善庵  
觀太神樂歌・七古

横山湖山●

題龍虎二図同高津青齋高井鴻山作・七古

松下松陰

二竜争玉図・七古  
或說此詩有異議因取其意更作一篇・五古

大槻磐溪●

松下松陰  
夢与英國船戰・七古

赤松桐陰  
到芸洲途中時元治紀元臘月・五古

さて、『櫻鳴集』収録の古体詩について見ると、詠史や題画の

作が比較的多いようである。これは当時の古体詩の題材として一般的な傾向に沿っているといえよう。また、諸国間の風物を詠じるに事寄せて時弊を諷する、白居易の新楽府等に倣う古体詩も散見される。東海道知鯨鮒宿の馬市を詠じた広瀬旭莊の「池立馬市」(二集)、信州小布施の毒薙を詠じた高井鴻山の「殺蠅菌」(四集)、旱害を救った湧泉を詠じた本沢虚堂の「起苗泉」(五集)

等である。

後者のような題材が大沼枕山の作風の特徴の一つであることは、以前に考察したことがある。<sup>(4)</sup> その点から、七集の巻頭に所収の植村蘆洲「千年蘆歌」は興味深い作品といえる。「千年蘆」は万年青の別称であり、幕末期江戸市中の民に甚だ賞讃され利殖の手段ともなったため、嘉永年間には禁令が出たほどであった。枕山はこのことを三十四句の七言古詩に詠じている。

昨日官家俄に令を下す

其の尤なる者を罪して価太だ軽し

富家望を失ひ諸市に売る

花戸色沮して品評を厭ふ

昨日貴重なるに今日賤し

覆雨翻雲は世上の情なり

(『枕山詩鈔二編』上、第二十五～三十句)

蘆洲は枕山の門人の中で最も大成した詩人の一人であり、天保元年（一八三〇）生まれで楊園とは同世代である。前述の『六名家詩鈔』の編集にも加わり、文久二年（一八六二）には自作四百首余りを収める『蘆洲詩鈔』三巻も刊行している。その蘆洲が『嚙鳴集』に寄せた「千年蘆歌」は枕山と同じく三十四句の七言古詩である。同じ韻は用いていないが、おそらく蘆洲は枕山の詩を踏まえて詠じた可能性が高い。

丹実金と化し貧は福に転ず

片葉誰か眞せん百鎰の鬱

龍断独り私す種樹の翁  
奇貨多く居く朽貫の屋

国を富するに術無く腐儒は常に貪し  
芸葉の蠹長く横に藏す

(第二十九～二十四句)

この蘆洲の詩を『嚙鳴集』に入れるに際して枕山の関与があることを証する資料は見出しえないが、少なくとも間接的な影響は認められよう。枕山自身の作は『嚙鳴集』三集以後は本文に現れず、題詞の詩のみを寄せている。自らは既に詩壇の一盟主として『嚙鳴集』のような選集への掲載については一步引き、蘆洲等の後生に託する姿勢であったともうかがえないであろうか。後に述べるように『嚙鳴集』には無名詩人が刊行の出資者となり自らの詩を掲載する側面もあるが、一方では読者の興味を得る作品を掲載して、詩集としての平衡をとる必要もあったであろう。その意味から蘆洲ほどの格の詩人には、ある程度の重みを持った作品が求められたのではなかろうか。「千年蘆歌」はその端的な例と目されるのである。

#### 四

次に無名詩人の作品の収録に関する事例から、『嚙鳴集』の性格について考察してみる。『嚙鳴集』はすべて「臥雲樓藏版」、すなわち楊園の私家版の形で刊行された詩集である。<sup>(5)</sup> これは石丸氏の推察によると、収録された詩家からの出資で採算がとれたため

であろうとのことである。

田舎の無名詩人たちはいくら作詩に励んでもその作品が印刷されて公刊される機会は絶無といつてもよい。ところが、楊園の傘下に入れば、江戸で発行される立派な詩集の中に己れの作品がおさまるのであって、定めし名譽あることと受け取られていたのだろう。(伊予史談) 289号)

こうした『嚙鳴集』の性格は、詩集と詩話という形態の違いこそあれ、文化文政期に菊池五山が陸續と刊行した『五山堂詩話』と似通うものである。無名詩人の作を『五山堂詩話』に取り上げる際に、五山が相応の「入集料」を作者から得ていたことは、揖斐高氏の「連の研究」で明らかにされている。

稿者も別の点で、『嚙鳴集』が『五山堂詩話』と同様の性格を示している事例を指摘しておきたい。揖斐高氏は「化政期詩壇と批評家—『五山堂詩話』論—」(文学)一九七五年七月号)において、以下のように述べている。

このケース(投稿)の中で目につくのは、物故した詩人の詩を友人縁者などが追福のために五山に採用を依頼した例である。おそらく、それは遺稿集を刊行するなどの詩人ではなく、またその資力もないという場合だが、『詩話』の卷六あたりから次第に多く見られるようになる。こうしたケースは『詩話』の権威が詩壇において確立されていった過程と平行して増加しているように思われる。(括弧内稿者注)  
具体的には、『五山堂詩話』の以下のようないい記事が該当しよう。

山本清渓、一詩冊を投示して曰く、「亡姪、名は正剛、字は士毅、筠溪と号す。幼より詩を嗜み、蕪詞堆を成す。中年下世し詩多く散失す。其の存する者僅僅に止る。一片の心血、吾、埋没するに忍びず。先生、幸に為に之を存せよ」と。余、其を録す。(卷六、原漢文)

履齋來たりて其の亡友小田生の詩を示して曰く、「生、名は邦之、瀑山と号す。勢の釜生田の人。零丁孤苦し郷を去りて都下某の商家に給事す。清謹力を竭す。少間には則ち端座して書を読み、又來たりて贊を吾が善庵先生に執る。既にして自ら謂らく、『吾が先は士たり。我、商と為ることを恥づ』と。幡然として業を改め、文芸を以て自ら奮はんと欲す。嗟哉、生、而立に二を少くるに病んで客舎に死す。實に今歳十一月十四日なり。筐中遺す所、詩文若干篇、別に雜記一巻有り。其の中、自戒の語多く、是れ以て其の人となりを見るに足るなり。充(履齋)、其の志を悲しみ、又草に木卒を惜しむ。幸いに此の詩を收むるを見る。長く姓名を留むれば、則ち以て一片の石に當つべし」と。余、特に履齋の山陽の情に深きを嘉し、即ち其の請に因て之を録す。(卷七、原漢文、括弧内稿者注)

そして、『嚙鳴集』第三集に「附錄」として収載された山崎桃蹊の詩が、これと同様のケースに当たる。  
余、既に此の集を刻するに友人黒田子友書を寄せて曰く、「吾が友、武陵の山崎翁<sup>(7)</sup>、国学を以て世に鳴る。其の子、子

温、天質温厚にして頗る俊才有り。好く書を読み、又画を善くす。嘗て余に従ひて遊び、余、之に勧めて詩を作らしむ。子温、乃ち昕朝夕詩に従事し、才藻日進す。余、其の他日成立有らんを望むなり。而して去歳、安政戊午冬病没す。年十七なり。嗚呼苗にして秀でざること哀れなる哉。翁、泣きて余に謂て曰く、「我が兒、不幸にして早沒し、以て世に顯る無し。幸い詩數十首有り。若し風を采る有らば、収録し以て不朽に伝ふを得ん。亦以て我が悲を慰むに足れり」と。余、之を語し、其の尤なる者若干首を撰し以て従つ。頃、聞く足下嘆鳴集を撰するを。若し此の詩を以て巻に附するを賜らば、唯に翁の喜のみならず、亦、余の喜なり」と。余、既に子友の囑を重んじ、又、子温の才にして早夭するを傷み、義、背くに忍びず。故に之を後に附すると云ふ。(原漢文)

知友を介して夭折した詩人の遺作にめぐり会ったという措辞も、あたかも『五山堂詩話』の贋みに倣おうとするかのようである。夙に石丸氏も指摘するように、『嘆鳴集』は清人俞曲園の『東瀛詩選』の選定資料に用いられた。『東瀛詩選』は、近代の新聞・出版事業の先駆者である岸田吟香が、日本漢詩を中国に紹介する目的で蘇州の俞曲園に日本人の漢詩集を届け選定を依頼したもので、明治十六年（一八八三）頃（清朝の光緒九年）に成立、清版が刊行された。『東瀛詩選』には出處の詩集が明記されているので、その中に『嘆鳴集』と後印の『今世名家詩選』も含まれていたことがわかる。これら楊園編の選集から『東瀛詩選』には九十

九人の詩人の百三十首が選ばれている。ちなみに、そのうち十六首が古体詩である。『嘆鳴集』の全詩篇からおよそ一割の詩が選ばれているが、古体詩に関しては二割近くが選ばれていることになる。もとより、俞曲園の選定が詩篇の評価の唯一絶対的な基準ではありえないが、中国の頑学の鑑識眼においても古体詩への評価が高かったことを示すものといえよう。

『東瀛詩選』が名家大家の作のみでなく、広く日本の詩人の詠を収める詩集と成り得たのに『嘆鳴集』に拠るところが大きかったと考えられる。右の山崎桃蹊の詩は、『嘆鳴集』に古体一首を含む計二十首が収められ、うち七首が『東瀛詩選』に選ばれている。ただし曲園は桃蹊の古体は採っていない。

しかし、『嘆鳴集』の存在なくしては、このように別集の刊行されないレベルの詩人の多くは、名前さえ記録されないまま埋もれてしまつたことは事実であり、そのことのみをもつても、楊園が『嘆鳴集』を編集刊行したことは、重要かつ看過すべきでない。冒頭で述べたように『嘆鳴集』は從来の文学史において全く顧みられず、漢詩文研究者でさえも言及することは殆ど無かつた書物である。向後の近世後期漢詩研究においては、楊園研究に関する石丸氏の功績を踏まえて、幕末漢詩壇の状況における『嘆鳴集』の存在を適正に評価する必要があることを再度確認しておきたい。本稿で『五山堂詩話』や『同人集』など先行して刊行された漢詩関係の書物と関連して『嘆鳴集』を考察したことが、その一階梯となるべく、さらに同時期の選集類を含めた精査を進めたい。

- (1) それぞれ拙稿「五山堂詩話」と化政期の漢詩選集」(「江戸文学」24二〇〇一年一月)、「大沼枕山選評『同人集』について」(「和漢比較文学」16一九九六年二月)、「万延二年(文久元年)刊『近世名家詩鈔』と『近世詩林』について」(「上方文藝研究」2二〇〇五年五月)
- (2) 「啞鳴集」には、「増刻」「附録」等と記して収録詩を追加した冊がある。たとえば、大阪大学附属図書館蔵本では「甲本」には増補部分がなく、「乙本」にはある。他の機関の所蔵本も管見の限り増補部分の有無による二種類に別れるようである。本稿では増補後の本を考察対象とする。なお、「啞鳴集」六十九集の板木を流用した『今世名家詩選』四巻が明治期に入つて刊行されている。
- (3) 石丸氏の論文には七百三十四名(延べ九百十七名)とあるが、これは第九集末尾の人名総覧により、序跋者や画人書家も含めて数えたためであろう。あるいは増補部分の算入に関して誤差が生じているかもしれない。
- (4) 拙稿「江戸後期の日本漢詩における白居易受容——大沼枕山・村上仏山を中心——」(「日本文化學報」14二〇〇一年)
- (5) 後印の『今世名家詩選』は「東京日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛」ほか東京、大阪、京都三府の書肆十軒の名を奥付に記す。日付や「官許」等の文字は刻されていない。
- (6) 『日本詩史 五山堂詩話』(新日本古典文学大系65 一九九一年、岩波書店)の指斐高氏の解説に詳しく記される。
- (7) 石丸氏はこの「武陵山崎翁」を山崎美成かと推察するが、美成の没年安政三年を文久と錯誤しており、美成は桃蹊の没した安政戊午(五年)より先に没しているので、この説には首肯しがたい。
- (8) 『東瀛詩選』の成立については、『東瀛詩選』(一九八一年、汲